



ビデオ通話による英語面接練習を導入した ブレンド型学習における学びの分析

遠山道子

概要

本研究は、ビデオ通話を利用した英語面接シミュレーションを含むブレンド型学習プログラムを経験した学生の学びを分析し、指導・練習方法の改善について検討することを目的とした。分析の対象は英語学習者46名による230件の学習日誌であり、分析方法はNVivoを利用したテキストマイニングによる質的データの定量的分析である。頻出語クエリで頻度の高い内容語群を抽出し、コードとして設定した。コードのテーマ別分類を試みた結果、学びのふり返りは①「知識・技能」、②「態度・感情」、③自分の行動、④英語「コミュニケーション」に分けることができた。理解に関する記述が最多で、相手の言った単語がわからない、あるいは発話時に言いたいことを表わす単語がわからない、という記述が目立った。この結果は、英語の実践経験を通して学習者が自身の知識・技能不足と英単語学習の意義に対する「気づき」を得た可能性を示している。また感情や態度に関しては「楽しさ」への言及が最多であり、次に多かったのは「焦り」であった。男女別では、男性の方が「焦り」より「楽しさ」への言及の割合が高く、男性の方がより楽しんで英語ビデオ通話に取り組んでいた可能性が示された。本ブレンド型学習にはコミュニケーションや学びの「楽しさ」を増大させる可能性があり、ポジティブ心理学の推奨する教育的介入の要素を備えている。今後は本プログラムの実施にあたり、学びや交流の楽しさと知識・技能の向上を定量的に確認することで効果検証していきたい。また学習者が英語を使った交流や学びを楽しめる仕組みづくりと、「わからない」時の対処法の指導と練習方法の見直しは継続的に行うべきであると考えられる。

キーワード：ブレンド型学習、エンジョイメント、ポジティブ心理学、ビデオ通話

(投稿日 2020年12月1日)

文教大学経営学部

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

Tel 0467-53-2111(代表) Fax 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

ビデオ通話による英語面接練習を導入した ブレンド型学習における学びの分析*

遠山道子**

1. 背景

1.1 外国語教育とデジタル技術

会話スキルの向上は、外国語を学ぶ者にとって難しい。その最たる原因は、練習時間の不足である (Long and Porter, 1985)。とりわけ日本のような同一民族の割合が人口の大多数を占める国や地域においては、教室の外で外国語を練習する機会になかなか恵まれない。また、アジア諸国の多くの国における外国語授業では文法理解と訳読が重視されており、習得した語彙と文法を活用して会話練習する時間が教室内においても圧倒的に不足している (Rao, 2002)。

こうした現状を改善するために、外国語教育に携わる研究者・指導者は、多様な教授法やツールの開発・利用を試みてきた。近年では、対面式で紙ベースの教科書を用いた通常授業に

CMC (computer-mediated communication) を融合したブレンド型学習が注目を集めている。メール (Yang & Chen, 2007) や、Facebook (Dogoriti et al., 2014)、Web 掲示板 (Chen & Yang, 2014) などの非同期型 CMC は、指導者が授業に導入する上で敷居が低く、学びにおける利点を確認されているが、リアルタイムで音声コミュニケーションを行う練習にはつながらない。では同期型 CMC はどうか。文字チャット、音声通話、ビデオ通話の順に導入と授業運営のハードルが上がると考えられるが、ビデオ通話には離れた場所にいる者同士がリアルタイムで相手の声を聞き、顔を見ながら会話できるという他にはない利点がある (Kozar, 2016; Loranc-Paszyk, 2015)。

ビデオ通話が計画的に活用され、かつ学習言語のネイティブ話者との会話が実現できた場合には、自信とモチベーションが醸成され、結果としてスキルアップが見込まれるという研究報告がある (Wu, Yen and Marek, 2011)。しかし計画的なビデオ通話の活用方法とはどういったもので、どのような用途が可能か、通話相手が非ネイティブの場合は効果が得られないのか等、まだ明らかにされていない点が多い。また COVID-19 の影響による大学授業のオンライン化や、対面・オンライン式のハイブリッド型の普及も視野に入れ、ビデオ通話活用の際の効果的な学習環境デザインと効果検証を早急に進め

* 本研究は JSPS 科研費 (JP17K02938、代表：遠山道子) の助成を受けたものです。本ブレンド型学習プログラムの企画・実施においては、文教大学経営学部の先生方ならびに英語科目ご担当の非常勤講師の皆様、様々な形でご支援いただきました。また本論で述べたフィリピン在住の英語インストラクターとのビデオ通話は、株式会社産経ヒューマンラーニングの協力により実現できました。この場を借りて改めて皆様に感謝申し上げます。

** 文教大学経営学部

✉ toyama3@bunkyo.ac.jp

る必要がある。

1.2 ビデオ通話を利用した英語面接シミュレーションを含むブレンド型学習プログラム

筆者は2017年に英語面接スキル育成プログラムの構築を開始した。まず「英語」で「面接」という状況が日本人学習者に相当な緊張や不安をもたらす点に着目し、外国語不安を測定する尺度 (Toyama & Yamazaki, 2018) と英語不安を軽減するメソッド (Toyama & Yamazaki, 2019a) の研究を行った。これら研究を進める過程で得た知見やノウハウは、英語面接における会話技能の育成に向けた動画教材の作成 (遠山, 2019) や、ビデオ通話による面接シミュレーションを導入したブレンド型学習プログラムの構築 (Toyama & Yamazaki, 2019b) において活用した。

2. 目的

上述の経緯で構築を進めてきたブレンド型学習プログラムを用いて、経営学部生46名に英語面接の指導を行い、面接シミュレーションを経験する機会を提供した際に収集した学習日誌を分析することにより、学生の学びについて理解を深め、指導・練習のあり方を検討することを本稿の目的とする。

3. 方法

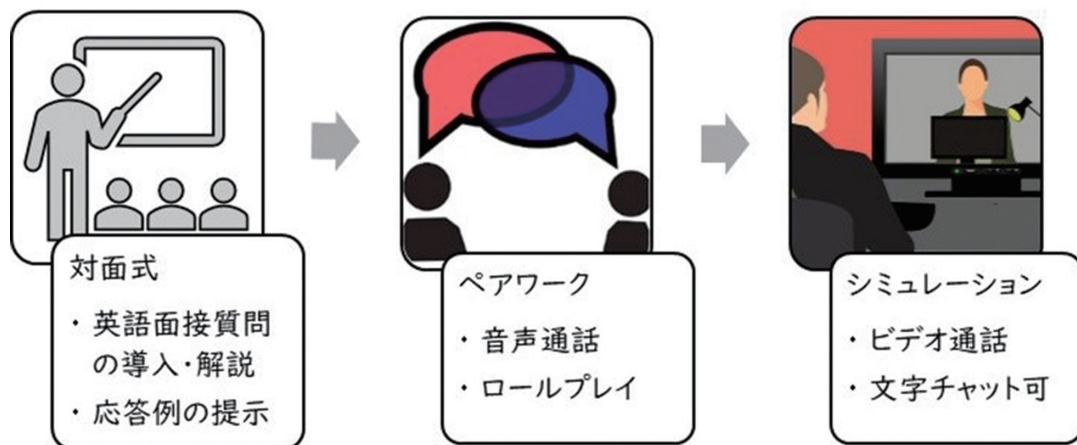
3.1 手続きと研究対象

ビデオ通話を導入したブレンド型学習プログラムを用いて、経営学部生46名に英語面接の指

導を行い、面接シミュレーションを経験する機会を提供した。学生は週1度の英語面接の練習とシミュレーションを5回経験した。46名は初級と中級でちょうど半々に分かれ、CALL (computer-assisted language learning) 教室で指導教員 (筆者) から英語面接でよく聞かれる質問と答え方のヒントについて導入と解説を受けた後、個々の準備時間と級友との練習を経て、ビデオ通話でフィリピン在住の英語インストラクターとの面接シミュレーションに臨んだ。シミュレーションはマンツーマン指導で毎回15~20分間実施した。シミュレーション前には5~10分間の「フリートーク」の時間を設けた。このフリートークは、学生が英語話者とオンラインで対面し、ウォームアップとアイスブレイキングを同時に行うことを目的とした。このブレンド型学習プログラム全体の運営は、筆者が行った。本プログラムの手順は図1に示したとおりである。

本プログラムでは毎週のセッション終了後、学生に「振り返り」を行う時間を与え、テキストファイルで指定のフォーマットを用いて日本語の自由記述式で学習日誌を残すよう指導した。学習日誌は、CALLシステムを利用しデジタルデータのまま一斉回収した。こうして得られた学習日誌は、合計230件であった。学習日誌は、筆者が用意したフォーマットに記入された形式で収集されており「感想」、「今日できたこと」、「今日できなかったこと」、「次の目標」、「困ったこと」の項目に分かれている。学生の自発的な成長を促すため、振り返りを行う際には、前回までの学習日誌を参照させ、自己の心理状態やスキルについて内省し、次の目標設定を行うよう指導した。

図1 英語面接シミュレーションを含むブレンド型学習プログラムの進行表



3.2 分析方法

学習日誌は、テキストマイニングの手法を用いて分析した。テキストマイニングは、PCを利用して質的テキストデータから新しい情報・知見・仮説・課題を「掘り起こす (mining)」手法であり、コンピューターと情報科学、数学、(計算)言語学の交差点に位置する分野 (Antons et. al., 2020) である。経営学、経済学、心理学などの学術領域、また企業のマーケティングなどの実務にも幅広く用いられている。テキストマイニングの利点は、第一に大規模テキストデータを効率よく分析できること、第二に分析の透明性と再現性が高いことと言える (Humphreys and Wang, 2018)。本研究では分析ツールとして、NVivo (ユサコ株式会社) を用いた。

学習日誌データをコード化するための手続きを述べる。まず NVivo で語の最小長を 2 に指定し、完全一致の設定で頻出語クエリを実施した。1 カウント以上記録された語は 900 アイテムであった。この中には「今日の目標」など教

員が記入しておいた文言が含まれていた為、ストップワードとしてそれらを除外した。つぎに抽出された頻出語を「類義語を含む」という設定でグループ化し、再び頻出語クエリを実行した。得られたクエリ結果から機能語を除外し、残った内容語 (群) のうちカウント数が高く、かつ本研究の目的に沿った類義語グループについては、概念化したコードとして設定した。以下では、これらコードの出現頻度と学習者の特性との関係性を示す。

4. 結果と考察

4.1 学習日誌の基本的特徴

本節では、ビデオ通話による英語面接シミュレーションを経験した学生が記録した学習日誌の基本情報を述べる。NVivo がリファレンス (参照) として示す事例の頻度が 10 以上のコードを観察し、それらをテーマ別に分類したところ、表 1 の結果となった。表の括弧内の数字は、各コードのリファレンスの件数であり、頻度の高

表1 学習日誌を特徴づける頻出概念（コード）とその分類

知識・スキル	態度・感情	自分の行動	コミュニケーション
聞きとり (109) 単語 (91) 話す (39) 文法 (19) 発音 (12)	楽しさ (67) 焦り (28) 笑顔 (16) 頑張り (13) 積極性 (10)	考える (53) 準備・練習 (18) 復習・覚える (14) 努力 (12) 頑張る (11)	理解 (145) 質問 (142) 答える (132) 会話 (111) 相手 (94) 自分 (75)

い順に示した。学習者は自分の「知識・スキル」、自分と相手の「態度・感情」、自分の行動、英語による「コミュニケーション」について、多様な観点から振り返りを行っていたことがうかがえる。

4.2 理解・聞きとり・単語に関する分析と考察

本節では、頻度の高い「理解」・「質問」・「答える」・「聞きとり」・「単語」について更なる分析と考察を行う。目的は、学生にとって何が理解できなかつたのかを探り、本プログラム改善に役立てることである。

テキスト検索とワードツリーを用いて「理解できない」・「理解できず」・「理解できなかつた」という表現を含む文脈と書き手について調べた。その結果、①理解できないという表現と結びついているのは質問・相手の話であり、②書き手は初級者がやや多い (56.3%) ことが明らかになった。さらに「わからない」を検索対象とし、活用形・類義語も含めて調べた結果、③ (相手の話す) 単語の意味がわからない、④ (自分が) 伝えたいことを表す単語がわからない、⑤ (質問に対して) どう答えればよいかわからない、という状況が浮かび上がった。

今回のブレンド型学習プログラムでは、英語コミュニケーション「困った時の表現集」を作

成し、学生に配布した。この表現集は、第二言語習得分野の先行研究に基づき、会話のトラブル時に意味交渉 (negotiation of meaning) して理解可能なインプット (comprehensible input) (Long, 1981) を引き出し、自らトラブルを修復して会話を持続するためのタクティクス (Long, 1983) をリストしたものである。以下に例を示す。

- 相手の言っていることが解らない時：
Excuse me?
- 単語やフレーズの意味を知らない時：What does … mean?
- 聞き逃した時：Once more, please.
- ゆっくり話してほしい時：Slowly, please.

本プログラム企画時、筆者はこれらの表現は既に中学・高等学校で修得済みと考えていた。したがって授業で念入りに練習することはせず、初回のビデオ通話前に配布し、簡単に紹介して活用を促した。しかしながら分析結果をふまえてふり返ると、学習者（とくに初級者）は、これら表現を十分に活用できていなかったように思われる。

こうした結果を踏まえ、本プログラムの改善点について検討する。今回配布した「困った時の表現集」は英会話実践経験が少ない日本人学生が未習得という前提で、配布して活用を促すのみでなく、解説と練習時間を十分に設ける必

要がある。また、上述⑤のように質問の返答の仕方がわからない場合に備えさせるために、例えば I don't know how to answer that question. How will you answer? といった対応例も表現集に付け加え、練習させるようにしたい。

もう一つ検討事項を挙げる。今回のブレンド型学習プログラムで扱った英語面接の質問は、What is your favorite book? や Why are you interested in business? や What do you expect to be doing 10 years from now? など採用面接や大学院入試面接などでよく聞かれるものに限定しており、最初の対面授業で教員が質問の意味や聞き手の意図を解説し、答え方の例も提示した。その後ペアワークで質問と回答の練習をし、最後にビデオ通話を利用して面接シミュレーションに取り組む手筈であった。しかし日本人英語学習者は英語の音声変化に不慣れであり、読めばわかるが聞くとわからないことが多い。たとえば遠山 (2019) でも報告したように、面接質問の What do you expect to be doing 10 years from now? に含まれる 10 years などは、「通常の速度」で発音すると鼻子音 [n] と半母音 [j] がつながって音声変化を起こすため、知っている／読めばわかる語句であるにも関わらず、中級程度の学生であっても聞いて「理解できない」質問となってしまうのである。この問題を解決するためには、学習者が英語音声変化に耳を慣らすしか方法はないが、別のプログラムが必要となるほどの学習内容量で時間がかかる。したがって特効薬として、対面式で英語面接質問を導入する際に、ゆっくりはっきり話す時の発音 (teacher's talk) のみでなく、通常の速度で音声変化を伴う場合の発音も紹介し、耳を鍛え、心構えをしてもらう時間を設けると良いと考える。

翻って上記③と④の結果は、本プログラムを通して学習者が単語の知識と聞きとる力の不足に「気づく」きっかけを与えられたことを示唆しており、これはプログラムの効果の1つと言える。通常授業の単語ドリルや小テストに真摯に取り組まない者の殆どは、自分の将来や生活において英単語を習得することの意義あるいは価値を見出せない場合が多い。そうした学生は英単語の暗記や聞きとりや発音練習において努力が不足していたと思われるが、今回のような実践的な英語会話の経験は、英単語を覚え、聞き取れるようにし、発音できるようにすることの価値に気が付く「きっかけ」となったに違いない。

4.3 楽しさと焦りに関する分析と考察

フィリピン在住の英語インストラクターとのフリートーク、および英語面接シミュレーションに対する、学習者の感情や態度について報告する。表1が示すように、最も頻度の高い概念は「楽しさ」(67回)であり、次が「焦り」(28回)であった。この2つは正反対とまでは言えないが、楽しさはポジティブで前向きな心情であるのに対し、焦りはマイナスのイメージがある。「楽しさ」としてグループ化された語は、楽しく話せた、会話がある程度成り立って楽しかった、笑顔の絶えない楽しい時間だった、共通の趣味が見つかり話が盛り上がり、意外に話せて面白かった、などである。一方でマイナスの印象を受ける表現として「焦り」にグループ化された語には、答えられなくて焦った、焦ってしまい yes と no ばかりになってしまった、初めてのことで少し緊張した、などであった。

男女別に「楽しさ」と「焦り」に関する語の割合を比べたところ、図2に示すように女性で

図2 「楽しさ」と「焦り」の男女差

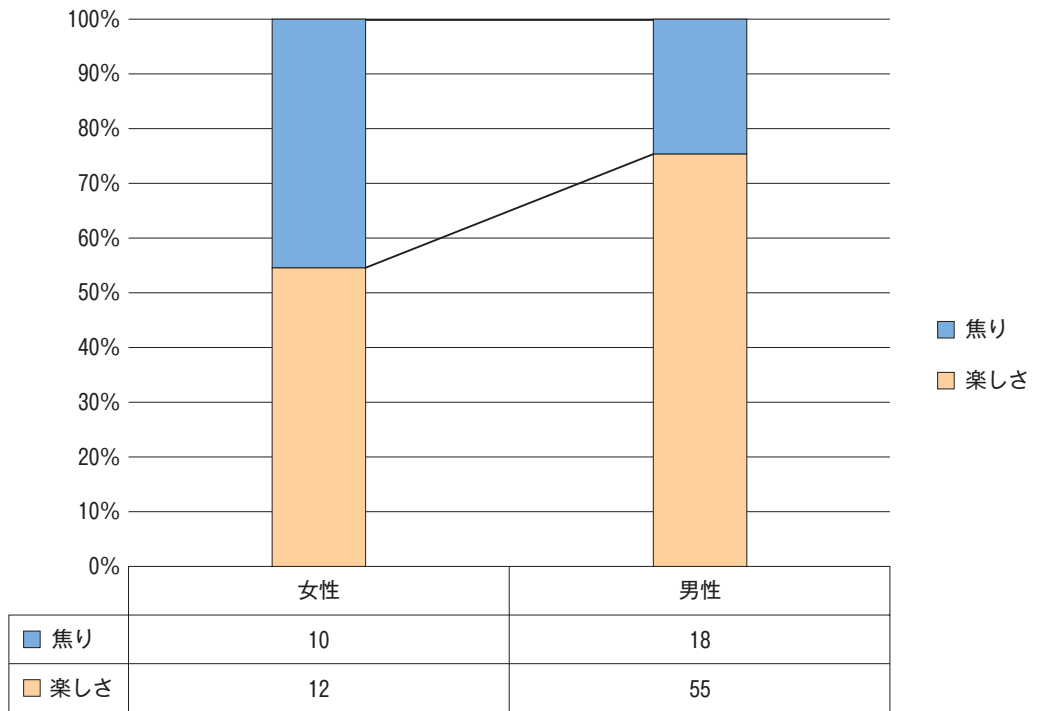
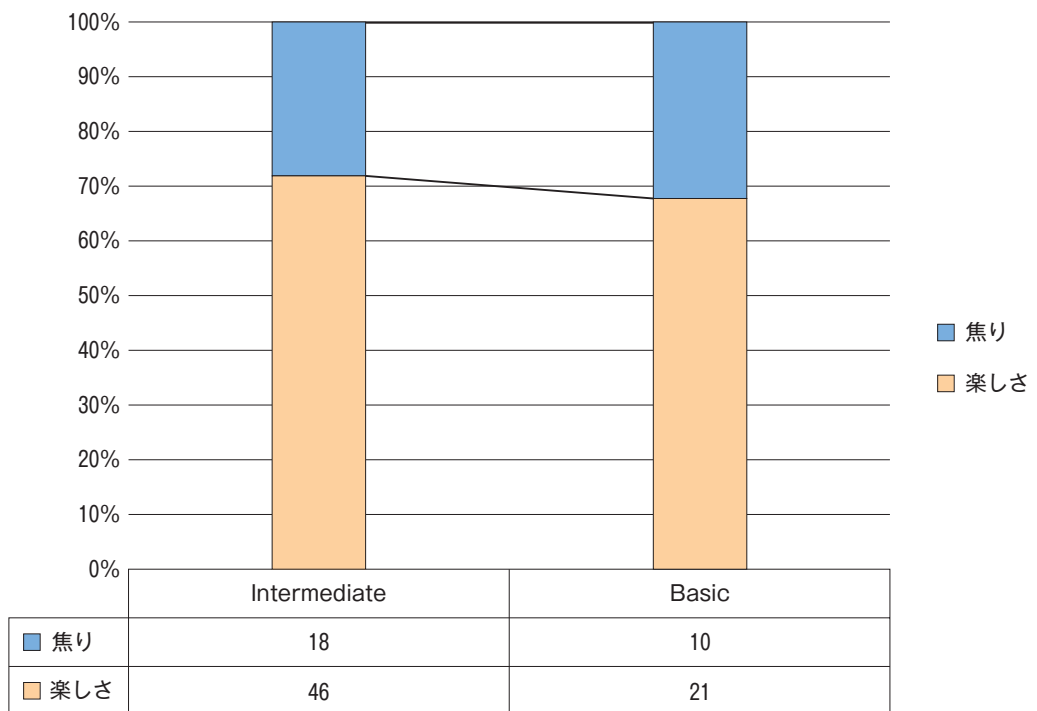


図3 「楽しさ」と「焦り」の習熟度による違い



はおよそ半々で「楽しさ」がやや勝っているのに対し、男性では「楽しさ」に関する語の比率が高いことがわかった。これらの結果は、フリリピン在住の英語インストラクターとのフリートークと面接シミュレーションにおいて、男性の方が楽しんで取り組めた可能性を示している。

さらに英語習熟度別に「楽しさ」と「焦り」に関する語の比率を探索した。図3に示すように、中級者 (Intermediate) と初級者 (Basic) を比べると大きな差はなくいずれも「焦り」より「楽しさ」の比率が高い。しかしながら中級者のほうが、やや「楽しさ」に言及した割合が高いことがわかった。

楽しさ (fun) や喜び (enjoyment) のようなポジティブな感情の経験は、学びの成功と結びついているという研究報告がある (Lucardie, 2014)。外国語教育においても同様の報告がある (Dewaele et al. 2019)。したがって本プログラムの英語面接シミュレーションで学生が「焦り」よりも「楽しさ」について言及していたことは好ましい結果と言える。ただし男女差が顕著であった点については検討の必要がある。一般的に女性の方が緊張や不安を感じやすい傾向にはあるが、英語で話すことや、面接シミュレーションに挑戦することに対して、女性が今回よりも肯定的な感情と態度で臨めるよう、対面での指導に工夫し、本プログラムを改善していきたい。

5. 今後の展望と結論

ビデオ通話による英語面接練習を含む本ブレンド型学習プログラムには、コミュニケーションや学びの「楽しさ」を増大させる可能性があり、ポジティブ心理学 (Macintyre, Gregersen,

& Mercer, 2019) の推奨する教育的介入の要素を備えている。今後は本プログラムの実施にあたり、学びや交流の楽しさと知識・技能の向上を定量的に確認することで効果検証していきたい。また初級学習者や女性が、英語を使った交流や学びをより楽しめる仕組みづくりについても検討していく必要がある。

一方で学習者が「わからない」時の対処法の指導と練習方法の見直しについても継続的に進めたい。英語コミュニケーションの実践を通して単語力不足を意識する学生が多かったことから、実践→知識・技能不足の認識→復習→実践のサイクルを適切にブレンドすることで、本プログラムによる学習意欲向上の効果も期待できる。

本研究は、従来の授業にビデオ通話を導入することで、外国語教育・学習環境をより良くデザインできる可能性を示した。COVID-19の猛威によりオンライン授業やハイブリッド授業 (教室対面とオンライン授業の混合) が普及する現状においては、ビデオ通話を利用した外国語トレーニングは導入しやすくなっているように思われる。より多くの学生がビデオ通話を利用して国外の言葉や文化にふれ、視野を広げ、学びと交流の楽しさに触れることを期待している。

参考文献

- Antons, D., Grünwald, E., Cichy, P., & Salge, T. O. (2020) The application of text mining methods in innovation research : current state, evolution patterns, and development priorities. *R&D Management*, 50 (3), 329-351.
- Chen, J. J., & Yang, S. C. (2014) Fostering foreign language learning through technology-enhanced intercultural projects. *Language Learning and*

- Technology*, 18 (1), 57-75.
- Dewaele, J. M., Chen, X., Padilla, A. M., & Lake, J. (2019) The flowering of positive psychology in foreign language teaching and acquisition research. *Frontiers in Psychology*, 10 (SEP). <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.02128>
- Dogoriti, E., Pange, J., & Anderson, G. S. (2014) The use of social networking and learning management systems in English language teaching in higher education. *Campus-Wide Information Systems*, 31 (4) <https://doi.org/10.1108/CWIS-11-2013-0062>
- Humphreys, A. and Wang, R.J.-H. (2018) Automated text analysis for consumer research. *Journal of Consumer Research*, 44, (6), 1274-1306.
- Kozar, O. (2016) Perceptions of webcam use by experienced online teachers and learners : a seeming disconnect between research and practice. *Computer Assisted Language Learning*, 29 (4), 779-789. <https://doi.org/10.1080/09588221.2015.1061021>
- Long, M. (1981) Input, interaction, and second language acquisition. In Native language and foreign language acquisition, ed. H. Winitz. Annals of the New York Academy of Sciences, 379.
- Long, M. (1983) Native speaker/ non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input. *Applied Linguistics*, 4 (2) 126-41.
- Long, M. H. and Porter, P. A. (1985) Group work, interlanguage talk, and second language acquisition. *TESOL Quarterly*, 19 (2), 207-228.
- Loranc-Paszyk, B. (2015) Videoconferencing as a tool for developing speaking skills. *Teaching, Learning and Testing Speaking in a Second Language*, 14, 189-203. https://doi.org/10.1007/978-3-642-38339-7_12
- Lucardie, D. (2014) The impact of fun and enjoyment on adult's learning. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 142, 439-446.
- Macintyre, P. D., Gregersen, T., & Mercer, S. (2019) Setting an Agenda for Positive Psychology in SLA : Theory, Practice, and Research. *Modern Language Journal*, 103 (1), 262-274. <https://doi.org/10.1111/modl.12544>
- Rao, Z. (2002) Chinese students' perceptions of communicative and non-communicative activities in EFL classroom. *System*, 30 (1), 85-105.
- 遠山道子 (2019) .「英語面接における会話技能の育成に向けて—デジタル動画の開発と応用—」 外国語教育メディア学会関東支部研究紀要 第3号, pp. 69-82.
- Toyama, M. and Yamazaki, Y. (2018) Exploring the components of the Foreign Language Classroom Anxiety Scale in the context of Japanese undergraduates. *Asian-Pacific Journal of Second and Foreign Language Education*, 3 (4) : 1-27. <https://doi.org/10.1186/s40862-018-0045-3>
- Toyama, M. & Yamazaki, Y. (2019a) Anxiety Reduction Sessions in Foreign Language Classrooms. *The Language Learning Journal*, <https://doi.org/10.1080/09571736.2019.1598474>.
- Toyama, M. & Yamazaki, Y. (2019b) Blended Learning Sessions to Improve Job Interview Skills. *Proceedings of the 18th European Conference on e-Learning*, 698-700.
- Wu, W. C. V., Yen, L. L., & Marek, M. (2011) Using online EFL interaction to increase confidence, motivation, and ability. *Educational Technology and Society*, 14 (3), 118-129.
- Yang, S. C., & Chen, Y. J. (2007) Technology-enhanced language learning : A case study. *Computers in Human Behavior*, 23 (1), 860-879. <https://doi.org/10.1016/j.chb.2006.02.015>



Journal of Public and Private Management

Vol. 7, No. 6, March 2021, pp. 1-8

ISSN 2189-2490

Qualitative Analysis of Students' Learning through Blended Learning to Improve Interview Skills in English

Michiko Toyama

Faculty of Business Administration, Bunkyo University

✉ toyama3@bunkyo.ac.jp

Received. 1. December. 2020

Abstract

This paper describes part of an ongoing study of pedagogies to help undergraduates improve their global and cultural competencies. With students' need to study or find a job abroad, blended learning sessions to improve undergraduates' interview skills in English were designed and developed. Videoconferencing was blended in face-to-face English language teaching to provide students with opportunities to talk with overseas instructors and simulate interviews in English on a one-on-one basis. Each session consisted of teacher-led face-to-face instruction, pair work using audioconferencing, and interview simulations through videoconferencing. Participants were business and management majors, and they engaged in the training for five weeks. The data source for this paper comes from students' learning diaries. NVivo – a qualitative data analysis software – was used to support coding and further analysis. Four major groups of codes identified in the students' learning diaries were 1) knowledge and skills, 2) attitudes and emotions, 3) behaviors, and 4) communication, showing that they made reflections on each of these topics. Further analyses showed that students had difficulty comprehending overseas instructors' questions and utterances and noticed their lack of vocabulary competence. The findings suggest that video conferencing helped the learners realize the values of practicing and developing vocabulary.

Keywords : blended learning, enjoyment, positive psychology, simulations, video chat

Faculty of Business Administration, Bunkyo University

1100 Namegaya, Chigasaki, Kanagawa 253-8550, JAPAN

Tel +81-467-53-2111, Fax +81-467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

経営論集 Vol.7, No.6

ISSN 2189-2490

2021年3月31日発行

発行者 文教大学経営学部 石塚 浩

編集 文教大学経営学部 研究推進委員会

編集長 森 一将

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

TEL : 0467-53-2111 FAX : 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>